チュッラ・ブッダゴーサの研究

森　　祖　道

(1)

ここに言う Culla-Buddhaghosa (小仏音) とは，パーリ上座部のみならず全仏教史上最大の註釈家と目され，その主著 Visuddhimagga 以外に三蔵の大部分に対して註釈 (aṭṭhakathā) を著わした，かの Buddhaghosa-ācariya (5 C. A.D. 前半)のことではなく，彼との区別を明確ならしめるために Culla (または Cūḷa) と言う形容詞を冠して呼ばれる今一人の Buddhaghosa のことである。

ところがこのいわば第二の Buddhaghosa は歴史上，ただ一人ではなかった。勿論これには様々な異説が存するが，従来の学者の見解を総合すると，ここに三人乃至四人の Culla-Buddhaghosa が存在したことが認められる。これらの Culla-Buddhaghosa はいづれも，南方仏教史上の巨人である前述の Buddhaghosa-ācariya 即ちいわゆる Mahā-Buddhaghosa (大仏音)[1]の存在を前提とし，彼との区別を意識して，彼ならざる今一人の Buddhaghosa と言う意味で，Culla-Buddhaghosa と呼称されているのが普通である。これら数人の，Buddhaghosa-ācariya ならざる Buddhagosa の各々について，従来の諸説を再検討しつつ，その全貌を，現存の資料によって明確になし得る限りにおいて，詳述せんとするのが本稿の目的である。

先ずその前提的考察として，パーリ仏教において，同一の固有名詞に "Mahā" あるいは "Culla" という形容詞を冠してその両者を区別すると言う具体例を検討してみたい。これは必ずしも上述の様な同名異人の場合のみとは限ら

ず，書物における同名異本の場合にもその例を見るし，又，必ずしも Mahā と Culla の両方を常に冠称するとは限らず，その一方のみをいづれかに付して両者を区別する例も存する。そしてこれには，内容的に分類して次の三つの場合が一応考えられる。

即ち第一には，類似の生涯を送った兄弟に対して用いる。例えばセイロンの Devānampiyatissa 王(250–210 B.C. 在位[2])の甥で，共に彼の大臣であったが後に Mahinda 長老の弟子となりアラカンになったと伝えられる，いわゆる Ariṭṭha 兄弟の，兄の方は Mahā-Ariṭṭha と呼ばれ，弟はただ単に Ariṭṭha と呼ばれている[3]。

第二の場合は，同じ方面で活躍し類似の業績を挙げた同名異人に対して，この様な差称を用いる例である。例えば Mahā-Buddhaghosa よりも多少後の時代に，彼に次ぐ註釈家として活躍し，Paramattha-dīpanī (小部註)，Nettipakaraṇa の註，Paramattha-mañjūsā (清浄道論註) 等を著わした Dhammapāla[4] に対して，Saccasaṅkhepa や数種の Ṭīkā を著わした今一人の Dhammapāla は Culla-Dhammapāla と呼ばれて区別されている[5]。

第三には，正篇と続篇の関係にある書物の前者と後者とを，Mahā と Culla を冠して別称する。例えば Mahāvaṃsa とその続篇の Cūḷavaṃsa (=Cullavaṃsa) の如き場合がそれである。

以上の三つの場合以外にも，まだ Mahā と Culla の様々な使い分けの実例は存するであろうが，上述の三例のうち Buddhaghosa に関する場合はまさしく第二の Dhammapāla の場合と同一である。

(2)

さてMahā-Buddhaghosa と同名異人の Buddhaghosa としては，先ず第一に前者の著作の執筆要請者の一人であり，従って彼と同時代の人であった Buddhaghosa を挙げなければならない。一般的に Mahā-Buddhaghosa の著作には，その序偈乃至は結文等に，その書が誰れか特定の人の執筆要請によって著述された旨が述べられ，その要請者の名前が明記されている場合が多い。

例えば Visuddhimagga は Saṅghapālaの要請によるものとされている[6]。

この様な執筆要請者として，Mahā-Buddhaghosa のいわゆる著作中，Aṭṭhasālinī と Sammohavinodanī とに Buddhaghosa と言う名前が示されているのである。Aṭṭhasālinī とは言うまでもなく，論蔵中の Dhammasaṅgaṇi の註釈であって，その序偈第八に

Visuddhācarasīlena nipuṇāmalabuddhinā
bhikkhunā Buddhaghosena sakkaccaṃ abhiyācito[7].

清浄行と戒と美妙にして汚れなき悟りとを有するビク・ブッダゴーサによって〔私は〕恭しく〔執筆を〕要請された。

と述べられている。

又，同じく論蔵中の Vibhaṅga の註釈である Sammohavinodanī の結偈(Nigamana-gāthā)の末尾には

……yācito ṭhitagunena yatinā adandha-gatinā, subuddhinā Buddhaghosena……[8]

徳の高い修行者で，速やかに〔涅盤に〕赴き，よく悟ったブッダゴーサによって〔私は〕要請され……

とある。

これら二つの例証には，上記の如く“Buddhaghosa によって”とあるのみで，“Culla-Buddhaghosa によって”とは表現されていない。この事実はかえって，この二つの例文が後世の付加などではないことを立証していると考えられる。何故ならば，Mahā とか Culla とか，およそ多少なりとも価値的評価を含む表現に関しては，そこに客観的に明確な判断基準が存する場合を除いては，当事者がその様な表現，特に自らを敬重するが如き修飾辞を自己自身に与える様なことは避けるのが自然であると考えられるからである。即ち前節の実例を再度挙げれば，兄弟を別称する場合には，兄弟関係の順序と言う客観的基準に従って，当然兄の方が Mahā-Ariṭṭha と呼称されるであろう。又，正続の関係にある二冊の書物ならば，正篇の方が勿論 Mahāvaṃsa，続篇が Cūḷavaṃsa と名付けられて当然である。

ところが二人の Buddhaghosa の場合は，明らかに同時代の者同士で，しかもビクと言う同一の身分にあるわけであるから，年令や教団内の地位に多少の差異があったとしても，どちらを Mahā と呼びどちらを Culla と呼ぶべきかという点に関して，客観的に自明なる基準は即座には設定し難い。従って少なくとも一方の「著者」が自分自身を Mahā-Buddhaghosa と僭称することを前提として，他方の「要請者」を Culla-Buddhaghosa と呼ぶことはまずあり得ないことである。現に上記の二書においては，著者の Buddhaghosa は要請者のBuddhaghosa を最大級の讃辞を以って表現しているわけである。従って，上述の様な Mahā-Buddhaghosa, Culla-Buddhaghosa という判別は，あくまでも後世の人がこの両者に対して歴史的評価を下した上で採用した表現であると考えられる。故に Mahā-Buddhaghosa の著述自身にはその様な表現が存在しないことは至極当然のことと言い得よう。

なお後の第4節で検討する如く，Aṭṭhasālinī がもし Mahā-Buddhaghosa の作ではないとしても，上記の事情は変らない。何故ならば，両 Buddhaghosa の時代やそれに非常に近い時代，即ち両者に対する歴史的評価が未だ定まらない間は（本書はこの時期に著わされたと考えられる）Mahā 及び Culla と言う差称を，第三者と言えども付すことは出来ないと思われるからである。

ところが一方，Sāsanavaṃsa 等と共にパーリ文献の著述史書として古典的に重要である Gandhavaṃsa に見られる記述は少しその内容が異なる。本書は17Cにビルマの Nandapañña によって著わされたと考えられ(9)，又，筆者の知る限りでは，Mahā-Buddhaghosa との区別を念頭において，その同名異人を Culla-Buddhaghosaと呼んだ現存最古の文献として注目される。この Gandhavaṃsa によれば，Culla-Buddhaghosa は Mahā-Buddhaghosa に対して七論の註を著わす様に要請した。即ち同書（p. 68）には，

Sattanaṃ Abhidhammagandhānaṃ aṭṭhakathāgaṇdho Culla-Buddhaghoso nāma bhikkhunā āyācitena Buddhaghosācariyena kato.

七種の論書の註釈書が小ブッダゴーサと言うビクによって要請されたブッダゴーサ師によって作られた，

とある。言うまでもなく七論の註とは前述の Aṭṭhasālinī (Dhammasaṅgaṇi 註) と Sammohavinodanī (Vibhaṅga 註) に，残る五論 Dhātukathā, Puggalapañ=ñatti, Kathāvatthu, Yamaka, Paṭṭhāna の凡てに対する註釈である Pañcap=pakaraṇaṭṭhakathā を加えたものである。そのうち，Aṭṭhasālinī と Sam=mohavinodanī には，前述の如く上の記述と内容的に一致する記載が見られるわけであるが，最後の Pañcappakaraṇaṭṭhakathā には，(Culla-)Buddhaghosa がその書の執筆要請者であるという記述は存しない。即ち Aṭṭhakathā 自身の記録によれば，(Culla-) Buddhaghosa は論蔵中の Aṭṭhasālinī と Sammoha-vinodanī だけの執筆要請者であり，Gandhavaṃsa によれば，彼はそれに Pañcappakaraṇaṭṭhakathā を加えた論蔵註全部の要請者であったことになる。

この部分的不一致は何に基づくものか不明であるが，後代の Gandhavaṃsa と言えども，何んらかの資料的根拠に基づいて著述されたと考えられる。従ってこの点に関する限り，今日見られる Aṭṭhakathā 自身の記述とは異なる何んらかの資料的根拠が，Gandhavaṃsa 制作の当時に，ビルマ辺りに存在したということも考えられるのである。

(3)

さて次には，前節で検討した論蔵註の一部あるいは凡ての執筆要請者としての Culla-Buddhaghosa とは別人と考えられる今一人の Culla-Buddhaghosa について考察してみよう。この Culla-Buddhaghosa とは，Jātattagīnidāna, Sotattagīnidāna と言う二書を著わしたと言われる人物である。即ち Gandha-vaṃsa (p. 63) には，

> Culla-Buddhaghoso nāmācariyo Jātattagīnidānaṃ Sotattagīnidānaṃ nāma dve pakaraṇaṃ akāsi.
>
> 小ブッダゴーサと言う師がジャータッタギーニダーナ，ソータッタギーニダーナと言う二冊の論書を作った。

と述べられている。しかしこの二書は共に現存していないので，その詳細は一切不明であるが，ただ Dr. Malalasekera は前者は Jātakaṭṭhakathā に関係

のあるものではなかったかと推察している[10]。

それはともかくとして，この Culla-Buddhaghosa に関して，従来の学説は二つに分れている。即ち Dr. Law は，論蔵註の執筆要請者の Culla-Buddhaghosa と上記の二書の著者の同名人とは別人であり，後者は前者よりもはるかに後代の人であると主張した。彼はその論拠として，Gandhavaṃsa (p. 63) において，執筆要請者の Culla-Buddhaghosaと同時代人であった Mahā-Buddhaghosa の名前と，二書の著者の Culla-Buddhaghosa の名前が挙げられている箇所では，両者の名前の中間に多数の著者名が列記されている事実を指摘し，結論として両者の間には年代的に大きな隔りがあるであろうと述べているのである[11]。しかし Dr. Law は以上の様に論じているだけであって，二人の Buddhaghosa の名前の中間に挙げられている多くの著者達が如何なる人々であるのか，特に彼等の所属年代はいつであったのかという問題については全く考究していない。従って Dr. Law の上の説明だけでは，彼の主張は十分な論拠を有するものとは認め難いのである。

これに対して，Dr. Malalasekera は執筆要請者の Culla-Buddhaghosa と上の二書の著者たる同名人とは同一人物であると看做している。但し彼もこの見解に対して何んらの説明も加えていない[12]。そこで筆者は，Dr. Law の所説の論拠となった Gandhavaṃsa 中の二人の Buddhaghosa の名前の中間に挙げられている多くの著者達について，一々詳細に吟味して，その所属年代を考察してみた。

Gandhavaṃsa の，Dr. Law が指摘した箇所 (pp. 59～63，以下ここをA所と呼ぶ) には，両 Buddhaghosa の名前の間に名称不明の者も含めて総数56人の論師の名が，それぞれの著書名と共に挙げられている。又，同書 pp. 66～67 (以下ここをB所と呼ぶ)には，彼等が出身地別に，インド人 (Jambudīpika)[13]とセイロン人(Laṅkādīpika)とに分けられて列挙されている。それによると，Mahā-Buddhaghosa より Kassapa に到る，名前不詳者も含めた11人はインド人であって[14]，Kassapa の次の Mahānāma より Culla-Buddhaghosa に到る46人 (内27人は名前不明，計算はA所に基づく) はセイロン人であることが判明する[15]。

更に，同書 pp. 68～72（以下ここをC所と呼ぶ）には，今度は著書名が中心になって，各書の著者とその執筆要請者の名前が各書名と共に列記されている。A, B, Cの三ケ所の列挙の順序やその数は，若干の混乱や不一致を除いては原則として一致している。

上記の資料内容を表示し，それに彼等の生存年代を結論的に併記すると，それは次の307～308頁の「表」の如くである。

次に，以上の様な著者達の生存年代等の推定の論拠を順次説明する。

(1) A所には，このBuddhadattaの著書として Vinayavinicchaya, Uttaravinicchaya, Abhidhammāvatāra, Buddhavaṃsa 註たる Maduratthavilāsinī の四書を挙げているが，C所にはこれらに加えて Jinālaṅkāra と言う一書が更に挙げられている。いづれにしてもこれらを著わした彼は，Mahā-Buddhaghosa と同時代人であったと考えられている[16]。

(2) DPPN. には実に17人の Ānanda の項が収められているが，そのうちA所及びC所に説く如く七論註に対する Mūlaṭīkā の著者たる Ānanda は8～9Cの人と推察されている[17]。

(3) A所及びC所に説く様な Nettipakaraṇaṭṭhakathā 等多数の Aṭṭhakathā や Ṭīkā を著わした Dhammapāla とは，Maha-Buddhaghosa より少し遅れた時代に彼に次ぐ註釈家として活躍した Dhammapāla のことである[18]。

(4) 二人の先師（pubbācariya）は，A所及びC所によれば，Niruttimañjūsā と言う Culla-Niruttiṭīkā 並びに Mahā-Niruttisaṅkhepa と言う二書をそれぞれ著わしたとされる。元来 Nirutti とは，Kaccāyanavyākaraṇa の著者である文法家 Kaccāyana の作とされ，それは Mahā-Nirutti と Culla-Nirutti の二部より成る[19]。そして Niruttimañjūsā は前述の如く，このうちの Culla-Nirutti の復註書（Ṭīkā）であり，又 Mahā-Niruttisaṅkhepa も恐らく Mahā-Nirutti の末書であると考えられる。従って Nirutti が Kaccāyana の作であるならば，上記の二書を著わした二人の先師は彼よりも後代の人と推定される。Kaccāyana の生存年代は5C～11Cの間であるが，そのうち7Cとする

	A　所	B　所	C　所	年代(A. D.)	備　考
0	Mahā-Buddhaghosa	Mahā-Buddhaghosa	Mahā-Buddhaghosa	5 C	註釈家
1	Buddhadatta	Buddhadatta	Buddhadatta	5 C	〃
2	Ānanda	Ānanda	Ānanda	8～9 C	〃
3	Dhammapāla	Dhammapāla	Dhammapāla	5～6 C	〃
4	dve pubbācariyā	dve pubbācariyā	pubbācariyā	7 C以降(?)	文法家，2人
5	Mahā-Vajirabuddhi	Mahā-Vajirabuddhi	Mahā-Vajirabuddhi	15C	註釈家
6	Vimalabuddhi	な　し	Vimalabuddhi	12C	文法家
7	Culla-Vajira	Culla-Vajirabuddhi	Culla-Vimalabuddhi		註釈家? 文法家?
8	Dīpaṅkara	Dīpaṅkara	Dīpaṅkara	13C	文法家
9	Culla-Dhammapāla	Culla-Dhammapāla	Culla-Dhammapāla	8～9 C	註釈家，Ānanda (2)の弟子
10	Kassapa	Kassapa	Kassapa	10C以前(?)	註釈家・歴史家?
11	Mahānāma	Mahānāma	Mahānāma	5 C後半～6 C前半	註釈家
12	ācariyā	aññatarācariyā	ācariyā		歴史家，5～6人
13	Nava-Mahānāma	Culla-Nāma	Culla-Mahānāma	5 C後半～6 C前半	
14	Upasena	Upasena	Upasena	6～7 C	註釈家
15	Moggallāna	Moggallāna	Moggallāna	12C後半	文法家
16	Saṅgharakkhita	Saṅgharakkhita	Saṅgharakkhita	12～13C	文法家，Sāriputta (23) 及び Medhaṅkara (30) の弟子
17		Vācissara			cf. (26)

18	Vuttodayakāra	Vuttodayaka	Vuttodayakāra		
19	Dhammasiri	Dhammapāla	Dhammasiri	11C以前(?) 14C	
20	dve ācariyā	aññatarā dvācariyā	dve ācariyā		2人
21	Anuruddha	Anuruddha	Anuruddha	12C初め	註釈家
22	Kkema	Khema	Khema	12C以前	註釈家
23	Sāriputta	Sāriputta	Sāriputta	12C後半	註釈家・文法家
24	Buddhanāga	Buddhanāga	Buddhanāga	12C後半	註釈家
25	Nava-Moggallāna	Culla-Moggallāna	Culla-Moggallāna	12C後半	
26	Vācissara	Vācitassa pācariya	Vācissara	12C後半	Sāriputta (23) の弟子, cf. (17)
27	Sumaṅgala	Sumaṅgala	Sumaṅgala	12C後半	Sāriputta (23) の弟子
28		Buddhapiya	Buddhapiya	13C(?)	=Dīpaṅkara (?)
29	Dhammakitti	Dhammakitti	Dhammakitti	12～13C	
30	Medhaṅkara	Medhaṅkara	Medhaṅkara	13C	文法家 (?)
31		Buddharakkhita	Buddharakkhita		
32		Upatissa	Upatissa	10C以降(?)	
33	vīsatācariyā	aññatarā vīsatācariyā	vīsatācariyā		20人
34	Saddhammacāra	Saddhammasiri	Dhammasiri	12C又は14C	文法家
35	Deva	Deva	Vācissara		=Vedeha (?)
36	Culla-Buddhaghosa	Culla-Buddhaghosa	Culla-Buddhaghosa		

説が有力であるから[20]，上の両人はそれ以降の人と一応は考えられる。しかしそれ以上の詳細は不明である。

(5) A所及びC所によれば，Mahāvajirabuddhi は Vinayagaṇḍhi（別名 Vajirabuddhiṭīkā 又は Vinayagaṇṭhi）と言う一書を著わした。本書は Vinaya の註釈書の難解なる語句を解説した復註書であり，彼はその一部をビルマの Pegu 王 Dhammaceti (1460–91 A.D. 在位)[21]に献じたと言われる。従って彼が Dhammaceti と同時代の人，即ち15Cの人であることは明らかである[22]。

(6) Vimalabuddhi の名はA所とC所にのみ見られ，B所には見られない。A及びC所によれば，彼は Mukhamattadīpanī 又は Nyāsapakaraṇa と呼ばれる一書を著わした。彼は文法家であって，いわゆる Kaccāyana 学派に属し12Cの人である[23]。

(7) ここで問題となる Atthabyākkhyāna という書は註釈書なのか文法書なのか判明しない。又，その著者も確定し難い。即ちA所にはその著者は Culla-Vajira とあり，B所には Culla-Vajirabuddhi とあり，C所には Culla-Vimalabuddhi とある。更に Sāsanavaṃsa (p. 34) は本書の著者を Culla-Buddha としている。もしB所の Culla-Vajira が Culla-Vajirabuddhi の誤り（末尾の buddhi の脱落と見る）であり，同様にして Sāsanavaṃsa の Culla-Buddha に Vajira を挿入し，末尾を訂正して Culla-Vajirabuddhi と改めるならば，C所を除いては，一応 Culla-Vajirabuddhi と統一出来るであろう。しかしもしそうであったとしても，彼の年代は判明しないが，Culla とあるので Mahā-Vajirabuddhi より後代の人と考えるならば，彼は15C 以降の人と言うことになろう[24]。

(8) Dīpaṅkara は南インドの Coḷa の出身であったので Coḷiya Dīpaṅkara と呼ばれ，又 Buddhapiya とも言われた。彼の著書に関しては，A所とC所の間に若干の混乱が見られる。即ち A所には彼の著書として，Rūpasiddhipakaraṇa, Rūpasiddhiṭīkā, Summapañcasutta の三書が挙げられているのに対し，C所には Rūpasiddhiṭīkā (Rūpasiddhigandhassa ṭīkāgandho) と Sampapañcasatti の二書だけが挙げられている。しかし Dr. Malalasekera は彼の著

書を Rūpasiddhi とその Ṭīkā 及び Pajjamadhu であるとしている[25]。いづれにしても彼 Dīpaṅkara は文法家 Vanaratana Ānanda の弟子であり，その Ānanda はセイロン王 Vijayabāhu III (1232—1236在位) と同時代の人と知られているから，従って Dīpaṅkara は13Cの人と推定し得るのである[26]。

(9) Culla-Dhammapāla はA所によれば Ānanda の第一の弟子 (jeṭṭhasissa) であり，Saccasaṅkhepa という一書を残した。C所も彼の著書に関しては同一の記述をしている。この Ānanda とは，Dr. Malalasekera の説によれば，前項（8）の Dīpaṅkara の師の Ānanda ではなく，Līnatthavaṇṇanā と呼ばれる Abhidhamma-Mūlaṭīkā を著わした Ānanda，即ち本節第（2）項の Ānanda（8～9C）に他ならず，従って Culla-Dhammapāla の生存年代も同じく8～9Cと推定される。因みに彼は上記の Mūlaṭīkā に対する復々註 (Anuṭīkā) の著者でもあったと考えられている。なお，Chapata (12C) が彼の Saṅkhepavaṇṇanā (Abhidhammatthasaṅgaha の註) において，Saccasaṅkhepa に触れているので，Culla-Dhammapāla は12C以前の人と言う考察がなされているが，上記の年代推定はこの考察とも矛盾しない[27]。

(10) A所によれば，Kassapa は Mohavicchedanī, Vimaticchedanī (=Vimativinodanī?), Buddhavaṃsa, Anāgatavaṃsa の四書を著わした。但しC所には前二書のみが彼の著書として挙げられている。いづれにしてもそのうち，第一と第二の書は abhidhamma に関する著述であろうと考えられている[28]。第三の Buddhavaṃsa とは勿論小部中の同名書のことでない。最後の Anāgatavaṃsa に対しては，セイロン出身のある Upatissa (第(32)項) が註釈を著わし (Gv. p. 72, etc.)，その彼は10Cに Mahābodhivaṃsa を著わした Upatissa と同一人であろうと言う説がある[29]。もしそうであるならば，Anāgatavaṃsa の成立はそれ以前のこととなる。しかしいづれにしても正確なことは不明である[30]。

(11) A所及びC所によれば，Mahānāma は Paṭisambhidāmaggaṭṭhakathā である Saddhammapakāsinī を著わした。同書の結文 (p. 526) には，Moggallāna の死後三年目に彼は本書を完成したと述べられている。そしてこの Mo=

ggallāna は多分セイロン王 Moggallāna I (495～512 A.D. 在位) であろうと考えられているから[31]，従って Mahānāma は5C後半より6C前半にかけて生存した人と推定されよう。

(12) B所には aññatarācariyo と単数形になっているが，A所には Dīpavaṃsa, Bodhivaṃsa, Cullavaṃsa, Mahāvaṃsa, Paṭisambhidāmagga に対する一書と言う合計五種類の書物をそれぞれ著わした ācariya として，複数形 (ācariyehi) で述べられている。又一方，C所には Dīpavaṃsa, Thūpavaṃsa, Bodhivaṃsa, Cullavaṃsa, Porāṇavaṃsa, Mahāvaṃsa と言う六書が著者不明の書物として一括して挙げられている。A所とこのC所とでは，その書名や数に若干の相違が見られるが，要するにここは Gandhavaṃsa の著者にとって，作者不詳の歴史書をまとめて列挙しているものと理解してよいであろう。

(13) A所によれば，Nava-Mahānāma (=Cullanāma) は Mahāvaṃsa 及び Cullavaṃsa の二書 (C所には navo vaṃso gandho とある) を著わしたとされる。この点は前項(12)の記述と明らかに矛盾しているが，とにかく彼は第(11)項の Mahānāma と同様，Moggallāna I の時代の人と推定されている[32]。

(14) この Upasena の著作名については，Gandhavaṃsa 自身の中に不一致が見られる。即ちA所には彼の著書は Saddhammaṭṭhikā とあり，C所には Saddhammapajjotikā とある。しかし両書は共に Mahāniddesaṭṭhakathā であると述べられていることから，前者は後者の別名であると考えられている[33]。そしてその著者 Upasena はセイロン王 Aggabodhi I (575～608 在位) の時代の人と看做されている[34]。

(15) A所及びC所によれば，この Moggallāna は Moggallānabyākaraṇa の著者である。彼は文法学の一派，いわゆる Moggallāna 学派の祖として高名であるが，Parakkamabāhu I (1153～81在位) の時代の Mahā-Kassapa と同時代人であると見られているから，従って彼 Moggallāna も12C後半の人と考えられる[35]。

(16) A所には彼 Saṅgharakkhita は Subodhālaṅkāra と言う一書を著わしたとあり，C所にはその外に Vuttodaya と言う一書も著わしたと記されてい

る。彼はその他数種の書物をも著わしたとする説もあるが，いづれにしても彼は Sāriputta（第(23)項，12C後半）及び Medhaṅkara（第(30)項，13C）の弟子であると考えられる[36]。従って彼 Saṅgharakkhita は12～13Cの人と見られる。

(17) この Vācissara は B所にのみ見られ，A所にも C所にも見られない名前である。従って彼の著作名は不明である。代ってA所とC所には，第(26)項に Vācissara の名を多くの著作名と共に挙げ，B所のその相当箇所には Vācitassa pācariya と言う名が挙げられている。Vācita (? or Vācitassa) と言う名は，DPPN. にも存しないし，Gandhavaṃsa においても pācariya と言う敬称は他に例がない。又，上の名はB所の他の写本には存しないから[37]，結局本項の Vācissara と第 (26) の同名人とは同一視すべきものと考えられる。但し Vācissara と呼ばれる者は兄弟で二人存在し，兄は abhidhamma と vinaya を専攻し，弟は文法学を学んで文法家 Sāriputta の一番若い弟子であったとされるが[38]，本項の同名人と第 (26) 項のそれとをこの兄弟にそれぞれ比定することは無理であろう。但し第 (26) 項の人物がこの場合の弟の Vācissara であることは後にその項において述べる如く明らかである。

(18) Vuttodayakāra（B所に Vuttodayaka とあるのは誤り）に関しては，A所には彼が Vuttodaya, Sambandhacintā, Khuddasikkhāṭīkā の三書を著わしたとあるが，C所には Vuttodaya のみが彼の著作として挙げられている。しかるに Sambandhacintā の結文によれば，上記の三書は凡て第 (16) 項の Saṅgharakkhita の作とされている[39]。いづれにしてもそれ以上のことは不明である。

(19) Dhammasiri（B所に Dhammapāla とあるのは誤り）の著書は，A所及びC所によれば Khuddasikkhā と言う一書である。同書の結文も又同様に記述している[40]。この書は11C頃すでにパーリ語よりシンハリー語に翻訳され，又12C後半頃には第 (16) 項の Saṅgharakkhita によって，その Ṭīkā が作られているので，彼 Dhammasiri は 11C 以前の人と推定されようか。但し DPPN (vol. I p. 1151) は彼を14C頃の人としている。

(20) 名称不詳の二人の師 (ācariya) によって，Porāṇaṭīkā と Mūlasikkhāṭīkā

と言う二書がそれぞれ著わされたとA所（ここに Purāṇaṭīkā とあるのは誤り）とC所に述べられている。前者は Khuddasikkhā の ṭīkā であり，これは普通は14C(?)の Revata（別名 Mahā-Yasa）の作とされている[41]。

(21) A所，C所共に Anuruddha の著書として，Paramatthavinicchaya, Nāmarūpapariccheda, Abhidhammatthasaṅgahapakaraṇa の三書を挙げている。彼はセイロンの Mūlasoma Vihāra の住職であって，12C初めの人と見られている[42]。

(22) この Khema は Khema（=Khemappakaraṇa）と言う一書を著わした。この点ではA所，C所共に一致している。Khemappakaraṇa は別名 Nāmarūpasamāsa とも呼ばれ abhidhamma の書である。これに対する Ṭīkā が第(26)項の Vācissara（12C）によって著わされているから，Khema はそれ以前の人と考えられる[43]。

(23) Sāriputta の著書としては，Vinayaṭṭhakathā に対する Ṭīkā である Sāratthadīpanī, Vinayasaṅgahapakaraṇa, 同書の Ṭīkā, Aṅguttaraṭṭhakathā の Ṭīkā たる Sāratthamañjūsā の四書がA所B所一致して挙げられている。そして更にC所には Sakaṭasaddasattha の Pañcikā と言う Ṭīkā も彼の作であると述べられている（A所に「五書」とあって実際には上述の四書しか記されていないのは，この Pañcikā が脱落したものであろうか）。そして上記の前四書は Parakkamabāhu 王の要請によって著わされたのである。この王は Parakkamabāhu I（1153～86在位）のことであるから，従ってこの Sāriputta は12C後半の人であることは明らかである。なお Majjhimaṭṭhakathā の Ṭīkā である Līnatthappakāsinī も彼の作であるとする説もある[44]。

(24) この Buddhanāga はA所C所共に Kaṅkhāvitaraṇī の Ṭīkā である Vinayatthamañjūsā の著者であるとしている。彼は前項の Sāriputta の弟子であるから，同じく12C後半の人と見てよいであろう[45]。

(25) この Culla-Moggallāna（A所には Nava-Moggallāna とある）は，A所C所共に Abhidhānappadīpikā と言う一書の著者であるとしている。彼は第(15)項の有名な文法家 Moggallāna と同一人物であるのか，あるいは Vijayabāhu

の碑文に現われたる同名人と同じであるのか，いづれとも決定出来ないが，いづれにしてもその作品の内容より考えて，彼が Parakkamabāhu I の晩年頃の人即ち文法家 Moggallāna と同時代人であることは確かと思われる[46]。

(26) 第 (17) 項で触れた如く，この Vācissara は兄弟二人いた同名人の弟の方と考えられる。A所及びC所にある如く，彼は Subodhālaṅkāraṭīkā を始め多くの著述を残している。彼は Sāriputta (第(23)項) の一番若い弟子として12C後半の人と考えられる[47]。

(27) この Sumaṅgala の著作として，A所とC所には Abhidhammatthavikāsanī と言う Abhidhammāvatāraṭīkā と，Abhidhammatthavibhāvanī と言う Abhidhammasaṅgahaṭīkā とが挙げられている。彼は文法家 Sāriputta の弟子の一人であるから，やはり12C後半の人と見られる[48]。

(28) この Buddhapiya をC所 (A所には記述なし) は Sāratthasaṅgaha と言う一書の著者としている。そして彼は第(8)項の Coḷiya Dīpaṅkara と同一人物と看做されている。もしそうならば彼は文法家 Vanaratana Ānanda の弟子で13Cの人と推察される[49]。

(29) A所，C所共にこの Dhammakitti の著作は Dantadhātupakaraṇa (又は Dantadhātuvaṇṇanā) であると記しているが，それは Dāṭhāvaṃsa の誤りであると言われている。彼はセイロンの Līlāvatī 女王 (1197～1200在位) の時代にこれを書いたとされるので，12～13Cの人と見られる[50]。

(30) Jinacarita と言う一書がこの Medhaṅkara (一名 Vanaratana Medhaṅkara) の著書であると，A所及びC所に述べられている。しかし Dr. Malalasekera はそれに Moggallāna 学派の文法書である Payogasiddhi と言う一書を彼の著書として加えている。いづれにしても彼は Bhuvanekabāhu I (1272—1284在位) の時代の人，即ち13Cの人と考えられる[51]。

(31) この Buddharakkita の名はA所には見られずB所及びC所にのみ見られる。C所によれば彼は Jinālaṅkāra と言う名の Jinālaṅkāraṭīkā を著わした。しかしこの説は一般に認められておらず，彼に関しては正確には何も知られていない[52]。

(32) この Upatissa については，A所にはその記述がなく，B所とC所にのみそれが見られる。C所によれば，彼は Anāgatavaṃsaṭṭhakathā を著わした。それ以上の正確なことは何も知られないが，ただ Anāgatavaṃsa 自身は10C以前(?)に第(10)項の Kassapa によって著わされているので，彼の年代はそれ以降のこととなる。Dr. Malalasekera は彼を Mahābodhivaṃsa の著者の Upatissa (10C) と同一人と考えている[53]。

(33) 少くとも Gandhavaṃsa の著者にとっては，作者不詳であった20種の書物がここに一括して挙げられている。その中には，Visuddhimagga, Abhidhamma, Nettipakaraṇa などの gaṇḍhi などいわゆる gaṇḍhi 類や，近年その写本が発見されて出版されたセイロンの古い説話集 Sīhalavatthu[54] なども含まれているが，又一方，テキストが現存していないものも多い。いづれにしてもこれら20種の書物は，その20人の著者が Gandhavaṃsa においては不明であった，その意味でいわば「雑書」に類するものであり，ここにそれをまとめて列挙したものと思われる。その中には概して余り古いものは含まれていない様である。

(34) この Saddhammasiri (A所に Saddhammacāra, C所に Dhammasiri とあるのは誤まり) の著書は Saddhatthabhedacintā であって，この点はA所とC所とは一致している。これは文法学に関する書物であって，近代の研究では著者は Pagon (ビルマ) の人とされているが，Gandhavaṃsa は彼をセイロン人と考えたので，ここに挙げられているわけである[55]。彼の年代に関しては Dr. Malalasekera は12Cの人と見，Dr. Forchhammer は14Cの人と見ている[56]。

(35) C所が著者名として Vācissara (これはすでに第(26)項に挙げられている) を出しているのに対し，A所とB所とは共に Deva の名を挙げている。A，B両所が一致して書名として Sumaṇakūṭavaṇṇanā を挙げているのでここはA所にある如く著者 Deva の Sumaṇakūṭavaṇṇanā と統一されるべきものと思われる。しかし本書は一名 Samantakūṭavaṇṇanā とも呼ばれ，普通には13Cの Vedeha の作とされているので，この Deva は Vedeha の誤りであろうか，正確なことは不明である[57]。

以上，Gandhavaṃsa において Mahā-Buddhaghosa と Cull-Buddhaghosa の名前の中間に列挙されている著者名とその著書に関して，長々と一々考察して来たわけである。それらの記述には若干の誤記や不統一が見られ，又，正確には判明しない点も存したが，しかし概略的に次の如く結論出来るであろう。

即ち，両 Buddhaghosa の名前の中間に列挙された56人（A所に依り，名前不詳者を含む）のうち，最初の11人は，Gandhavaṃsa が Jambudīpika と看做した者であって，残りの45人は Laṅkādīpika と看做した者である。そしてこの二つのグループごとに，abhidhamma 関係，歴史関係，文法学関係などと言う内容別にある程度は分類しつつ，年代順に配列しようと試みた意図がそこにはうかがわれると思われる。勿論その配列基準は絶対的なものではないし，一方では Gandhavaṃsa 自身が思わぬ誤りを犯していたり，又，今日ではもはや判明出来ない人物や著書が含まれていたりするので，整然とした編年史的形態はそこに浮び上っては来ない。がしかし上の様な不備な点が存するにもかかわらず，少くとも，Culla-Buddhaghosa が Mahā-Buddhaghosa と同時代人ではないと言うことだけは十分に証明出来たであろう。Gandhavaṃsa の上記の列挙名を編年史的に見る限り，彼 Culla-Buddhaghosa はどれほど早く考えても10C以前の人ではなく，多分12～13C頃かそれ以降の人と思われる。従って彼は Mahā-Buddhaghosa の著作の一部に対する執筆要請者であった今一人の Culla-Buddhaghosa とは明らかに別人であると結論されるのである。

（4）

次に「第4の Buddhaghosa」と言うべき人について検討してみたい。一般に Mahā-Buddhaghosa の著作を始めとする多くのパーリ語の aṭṭhakathā に対する，近代の批判的文献研究は，13C中葉の Dhammakitti やその後の人達によって順次編纂された Cūḷavaṃsa や 14Cの Dhammakitti の作とされる Saddhammasaṅgaha などに見られる古来の伝統的所説[69] に幾多の疑問を投げかけた。特に Mahā-Buddhaghosa の著作の真偽問題は，多くの学者によって様々な見解が提示され，未だ真の解決を見ていない。

その中で，Dhammasangaṇi 註たる Aṭṭhasālinī の著者に関しては，Dr. P. V. Bapat と佐々木現順博士とによって新しい主張がなされた。それは，本書の著者は Mahā-Buddhaghosa (Buddhaghosa-ācariya) ではなくして，彼よりも少し後代の同じ Mahāvihāra 派に属する同名異人の Buddhaghosa であると言う説である。この説は本稿で言う「第4の Buddhaghosa」の存在を意味するものであろう。よって次にこの所説に論及してみよう。

Dr. Bapat は主として abhidhamma 的術語や教理的説明に関する25の問題点を提起して，それらに関して Aṭṭhasālinī と，Visuddhimagga やその他の aṭṭhakathā など明らかに Mahā-Buddhaghosa の作とされているものとを詳細に比較した結果，上述の様な結論に達した[59]。

一方，佐々木博士は「叙述法」，「教判」，「思想」と言う三方面より同様の比較研究をなして，同様の結論に到達した[60]。しかし，両氏の精密な検討の結果，Aṭṭhasālinī が Mahā-Buddhaghosa の手に成るものではないと結論されたことが妥当であるとしても，その著者の名前がやはり "Buddhaghosa" でなければならないとは限らないと考えられる。何故ならば上記の比較研究は，本書が Mahā-Buddhaghosa 以外の，同じ Mahāvihāra 派の人で彼に近い時代に活躍した人によって著わされたと言うことを論証しているだけであって，その著者名が同じく Buddhaghosa であると言う積極的根拠は乏しいと思われるからである。この場合の様に，古来の伝統的所説が否定された場合には，その所説の重要なるポイントである著者名のみは依然として信用すると言うことは適当でないと考えられる。何故ならば，この様な伝統説が成立した背後には，Mahā-Buddhaghosa と言う偉大なる存在を前提とし，彼の偉大性を増大すると同時に，彼の名を冠することによって本書自身の権威も高めようとする意図が存したことは十分に察知出来るからである。このことは Aṭṭhasālinī の場合のみに限らず，Dhammapadaṭṭhakathā, Jātakaṭṭhakathā など同様の例が今日，他にも指摘されていることからも明らかであろう。

いづれにしても，この様な「第4の Buddhaghosa」の存在を認めるためには，なお多くの論証が必要かと考えられる。因みに，Aṭṭhasālinī の執筆要請

者が Mahā-Buddhaghosa 自身であるとし，その著者は彼の弟子たる別の Buddhaghosa であると言う Mrs. Rhys Davids の示唆も[61]，同様にして根拠の乏しい説と思われる。

最後に，はるか後代に生存した Buddhaghosa と呼ばれる人について簡単に言及しておこう。このいわば「第5の Buddhaghosa」即ち「第4の Culla-Buddhaghosa」は 15C 終り頃のビルマ人であって，始め Buddhavaṃsa と言い，ビルマの Martaban (Muttimanagara) の女王の補佐役を勤め，特に法律に明るかった。後に彼はセイロンに留学して僧となり，仏典とマヌ法典とを携えて Rāmaññadesa (下部ビルマ地方) に帰って来て，"Culla-Buddhaghosa" と名乗る様になった。一方，ビルマには古来，Mahā-Buddhaghosa はビルマの出身者であって，セイロンでの著述活動の後には，再び母国ビルマに帰って来たのだと言う伝説が存したので，この様な Mahā-Buddhaghosa と類似の生涯を送りつつあると信ぜられた彼は，この伝説と結びつけて考えられる様になり（彼が Culla-Buddhaghosa と名乗ったこと自体すでにこの伝説の影響かと思われる），後には Culla と言う限定辞を除いて，ただ "Buddhaghosa" と自他共に称する様になった。彼の感化力は大いに増大し，ついに自らの一宗派を Martaban 地方において創立し，その派祖となったと言われている[62]。

〔註〕

(1) 彼を呼ぶ場合は通常は，Buddhaghosa-ācariya あるいは単に Buddhaghosa と言うのであるが，Culla-Buddhaghosa の存在を念頭においた場合には，Mahā-Buddhaghosa と呼ぶこともある。例えば *Gandhavaṃsa* (JPTS., 1886) p. 59 には Buddhaghosa の著作を列挙して，

Mahā-Buddhaghoso nāmācariyo Visuddhimaggo……'ti ime terasa gandhe akāsi.

とある。なお本稿においてはその例に従って，彼を凡て Mahā-Buddhaghosa と呼ぶこととする。

(2) セイロン王の在位年代は凡て C. W. Nicholas & S. Paranavitana: *A Concise History of Ceylon*, Colombo, 1961 の付録の "A Chronological List of Ceylon Kings" による。

(3) E. W. Adikaram: *Early History of Buddhism in Ceylon*, Colombo, 1953, pp. 53～54.

(4) *Gandhavaṃsa* (=Gv.) p. 69, etc.; B. C. Law: *The Life and Work of Buddhaghosa*, Calcutta, 1923, p. 96. なお Dr. G. P. Malalasekera はこれら一連の註釈書は数名の異なる Dhammapāla によって著わされたもので，その著者を一々判別することは困難であるとしてい

る (Malalasekera: *Dictionary of Pāli Proper Names* (=DPPN.), London, 1960, Vol. II, pp. 1146～47)

(5) Gv. pp. 60, 70; G. P. Malalasekera: *The Pāli Literature of Ceylon*, Colombo, 1958, p. 203.

(6) *Visuddhimagga*, vol. II, p. 712.

(7) P. V. Bapat, ed.: *Aṭṭhasālinī*, Poona, 1942, p. 1 なお PTS. 版の本書に "……nipuṇā malabuddhinā" とあるのは誤りである。

(8) *Sammohavinodanī*, p. 523.

(9) Gv. p. 80; M. H. Bode: *The Pāli Literature of Burma*, London, 1909, Introd. p. x; cf. B. Gosh, tr.: *Pāli Literature and Language by W. Geiger*, Calcutta, 1956, pp. 48～49.

(10) Malalasekera: *op. cit.*, p. 126; DPPN. vol. II, p. 307.

(11) Law: *op. cit.*, p. 84, footnote 1.

(12) DPPN. vol. II, p. 307.

(13) Jambudīpika とは字義通りにはインド人のことであるが，内容的にはこの場合は，インド亜大陸出身者のみでなく，ビルマの出身者も含めていると考えられる。因みに Mrs. Bode は "Jambudīpika (i.e. belonging to Burma)" と解説している (Bode: *op. cit.*, p. 28)

(14) 即ち "ime dasācariyā Jambudīpikā heṭṭhā vuttappakāre gandhe akaṃsu" とある (Gv. p. 66)

(15) 但し説明文とし，"ime ekapaṇṇāsācariyā Laṅkādīpikācariyā nāma" とあるのは Culla-Buddhaghosa に続く 2 名を含めた数であるが，それでもなお実際の数と一致しない (Gv. p. 67)

(16) Malalasekera: *op. cit.*, pp. 105～106; DPPN. vol. II, p. 207; Adikaram: *op. cit.*, p. 9.

(17) Malalasekera: *op. cit.* pp. 202～203, 206～207; DPPN. vol. II, pp. 270～271.

(18) Malalasekera: *op. cit.* p. 113; DPPN. vol. I, pp. 1145～46; Adikaram: *op. cit.*, p. 9.

(19) DPPN., vol. II, p. 79.

(20) 片山一良「パーリ語文法の系譜」(『印度学仏教学研究』17巻 2 号) p. 154.

(21) Bode: *op. cit.*, p. 37.

(22) *ibid.*, p. 155.

(23) 片山一良: 前掲論文 p. 155; Malalasekera: *op, cit.*, p, 180; Bode: *op. cit.*, p. 21.

(24) cf. Bode: *op. cit.*, pp. 27～28.

(25) Malalasekera: *op.cit.*, pp. 221～22.

(26) *ibid.*, p. 211. なお第(28)項 Buddhappiya の項参照のこと。

(27) *ibid.*, p. 203.

(28) *ibid.*, pp. 178～79.

(29) *ibid.*, pp. 156～57; DPPN. vol. I, p. 66.

(30) Malalasekera: *op. cit.*, p. 160. なお本節第(32) Upatissa の項参照のこと。

(31) DPPN. vol. II, p. 516; Adikaram: *op. cit.*, p. 9.

(32) DPPN. vol. II, p. 516; Malalasekera: *op. cit.*, pp. 139～41.

(33) DPPN. vol. II, p. 1017.

(34) Adikaram: *op. cit.*, p. 9.

(35) Malalasekera: *op. cit.*, p. 179; DPPN. vol. II, p. 483.

(36) Malalasekera: *op. cit.*, pp. 197～198.

(37) Gv. p. 66, footnote 3.

(38) Malalasekera: *op. cit.*, p. 204.

(39) *ibid.*, p. 198.

(40) *ibid.*, p. 77.

(41) *ibid.*, pp. 77～78; DPPN. vol. II, p. 547.

(42) Malalasekera: *op. cit.*, pp. 168～169.

(43) *ibid.*, pp. 108～109, 155～156; DPPN. vol. II, p. 849.

(44) Malalasekera: *op. cit.*, pp. 190～192.

(45) *ibid.*, p. 201.

(46) *ibid.*, pp. 187～188.

(47) *ibid.*, p. 204.

(48) *ibid.*, pp. 108, 173; cf. DPPN. vol. II, p. 1237.

(49) Malalasekera: *op. cit.*, pp. 220～222.

(50) *ibid.*, pp. 207, 215; DPPN. vol. I, pp. 1056, 1069.

(51) Malalasekera: *op. cit.* pp, 230～232.

(52) *ibid.*, pp. 110～112.

(53) *ibid.*, pp. 156～157, 160～161.

(54) A. P. Buddhadatta, ed.: *Sīhalavatthuppakaraṇa*, Colombo, 1959; 橘堂正弘「Sīhaḷavatthuppakaraṇa について (一)」(『印度学仏教学研究』18巻1号 pp. 142～143)

(55) Gv. p. 67.

(56) DPPN. vol. II, p. 1018; Em. Forchhammer: *The Jardine Prize—An Essay—*, Rangoon, 1885, p. 36; cf. Bode: *op. cit.*, pp. 20, 22.

(57) Malalasekera: *op. cit.*, pp. 223～224.

(58) *Cūlavaṃsa*, chap. 37, vv. 215～46.; *Saddhammasaṅgaha* (JPTS., 1890) p. 53.

(59) Bapat: *op. cit.*, Introd. pp. xxxiii～xl.

(60) 佐々木現順『仏教心理学の研究』pp. 69～92.

(61) Rhys Davids: *A Manual of Buddhism for Advanced Students*, 1932, p. 30 (但し Bapat *op. cit.*, Introd. p. xl. footnote 1)

(62) Forchhammer: *op. cit.*, pp. 64～65; Bode: *op. cit.*, p. 35; 立花俊道「ビルマの仏教」(『仏教研究』第6巻第2・3号,「南方圏の宗教」特輯号) p. 109.

(本稿にて引用されたるパーリ原典は, 特記のない限り, 凡て PTS 版である)